

## T. S. ELIOT の *VIA MEDIA* について\*

村 田 俊 一

### 序

1926年、T. S. Eliot は ‘Lancelot Andrewes’ の中で、*via media* は「英国国教会の精神」(Anglicanism)<sup>1</sup> であると言っているが、これはカトリシズムとプロテスタンティズムの中間にあつて、相当幅広い意見の相違を抱擁し、共存せしめ得る性格を持っているものである。John Henry Newman の *Apologia pro Vita Sua* を編纂したMartin J. Svaglic は、George Herbert の ‘The British Church’ という詩の一行、‘The mean thy praise and glory is’ を引用し、*via media* という語を作り広めたのは Newman であつたろうと言っているが、<sup>2</sup> この *via media* という言葉の字義通りの意味は、Aristotle に見られる「中間のもの」、つまり「中道」である。<sup>3</sup> Eliot と交友があつた Paul Elmer More は *Anglicanism* の中で、英国国教会の聖職者達は、この Aristotle の「中間のもの」「中道」なる考えをキリスト教の ‘spiritual law’ へ押し広げたものであると言っている。<sup>4</sup>

本稿では、Eliot に見られる *via media* の考えは、単に英国国教会の精神を示す時に使われるばかりでなく、まさに字義通りの「中道」の意味で、Eliot の批評の根底を支える一つの精神となつていて、この考えの背景には、F. H. Bradley の懐疑的精神 (scepticism) が見られ、Eliot は、これを宗教の次元ま

\* 本稿は日本英文学会第51回大会(於専修大学 1979. 5. 27)で発表した論文に加筆修正したものである。

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays* (London: Faber and Faber, Ltd., 1966), p. 341.

<sup>2</sup> John Henry Cardinal Newman, *Apologia pro Vita Sua*, edited, with an introduction and notes, by Martin J. Svaglic (Oxford: at the Clarendon Press, 1967), p. 527.

<sup>3</sup> *The Basic Works of Aristotle*, edited and with an introduction by Richard McKeon (New York: Random House, 1941), pp. 957-8.

<sup>4</sup> *Anglicanism*, compiled and edited by the late Paul Elmer More, and Frank Leslie Cross (London: S.P.C.K., 1962), p. xxiii.

で高め、これを乗り越えて英国国教会へ改宗していったのではないかということ考察して行きたい。

## I

Eliot の批評論を仔細に読むと、この字義通りの「中道」を意味する *via media* の考えがしばしば見受けられる。例えば、1929年の‘Dante’の中で、二つの極端な態度、つまり、一つは「ダンテの詩の構想や、哲学や、隠された意味の理解が詩の鑑賞にとって本質的なことである」という歴史的批評態度と、もう一つは、「これらのことは全く関係なく、ダンテの詩は…その枠組を研究することなしに、それ自身で楽しめるものである」という、言わば、非歴史的批評態度とのいずれの極端をも避けている。<sup>1</sup> このような Eliot の考えは、1930年の‘Poetry and Propaganda’の中で、詩は、我々自身の信念や好みを代弁してくれるものであるとする態度と、詩の享受は、詩の題材には無関係で、人生から分離して考えるものであるとする態度との間には一つの連続的なもの (a continuous range) があると言っていることにも見受けられる。<sup>2</sup> 実際、‘Dante’の註で、Eliot は信念 (belief) の問題を論じながら、極端まで押し進めるやり方を「異端」(heresies) と呼び「正統主義」(orthodoxy) は「対立の中でしか成立しない」と言っているが、<sup>3</sup> これは Eliot が 1932年の *The Listener* の中で、異端は神秘的な一つの側面を他方を排除するまで強調し、正統は、くずれやすい人間にとっては不可能であると言って教会の必要性を説明している一節<sup>4</sup> に深く関係しているものと思われる。Eliot が 1934年の *After Strange*

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, pp. 237-8. Cf. Eliot の批評態度について J. C. Ransom は *New Criticism* (Norfolk, Connecticut, 1941) の中で、Eliot を ‘historical critic’ (pp. 135-208) と考えているが、一方、E. Willson は ‘Historical Criticism’ (in *Critiques and Essays in Criticism*, ed. by Robert Wooster Stollmen [New York, 1949]) の中で ‘nonhistorical’ (p. 449) と見ている。しかし、本稿の *via media* の立場に立つならいずれも極端に走った意見であろう。

<sup>2</sup> T. S. Eliot, “Poetry and Propaganda,” *Literary Opinion in America*, edited by Morton Dauwen Zabel (New York: Harper and Brothers, 1951), p. 103.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 270.

<sup>4</sup> “I shall not say much directly about Christianity, but in all that I say I shall speak from the point of view of orthodox Christianity. At least, I aim at Orthodoxy. For heresy, which consists in emphasising one aspect of the mystery to the exclusion of the other, is a natural tendency of the mind; a complete living orthodoxy is (except through the infusion of exceptional grace) almost impossible to the frail human being at every moment of his life; which is one reason why the Church is necessary.” (T. S. Eliot, “Christianity and Communism,” *The Listener* [March 16, 1932], p. 382)

*Gods* の中で、D. H. Lawrence を「ほとんど完全な異端の例」と批評し、James Joyce を「倫理的に正統」と言っている<sup>1</sup> その根底には、Eliot の *via media* を根底とするこの「異端」「正統」の考え方があったように思われる。また、Eliot は最初、Irving Babbitt を尊敬していたが、‘The Humanism of Irving Babbitt’ の中で、ヒューマンイズムは宗教に取って代わるものとする Babbitt の主張に異議をはさみ、その弟子である N. Foerster を異端者と呼び、彼を「ある一つの真理を捉え、それが虚偽になるまで押し進める人」<sup>2</sup> と言っているが、その背景には、Eliot が *The Criterion* の中で、Babbitt を「気質に於て、余りにも極端に走る個人主義者なので、ある体系を作り上げたり、ある学派の創立者とはなり得ない」<sup>3</sup> と見た Eliot の態度が反映されているように見える。

このように、両極端を避け、*via media* を歩もうとする Eliot の態度は、*The Use of Poetry and the Use of Criticism* の中で、‘serious *via media*’<sup>4</sup> あるいは ‘in judicious moderation’<sup>5</sup> という言葉に表わされている。このような Eliot の *via media* に対する考えは、更に詳しく調べようとするなら、その他いろいろ見出されることと思うが、Eliot は、このような *via media* の精神を 1927 年の ‘John Bramhall’ に於て、「あらゆる道の中でたどるのに最も難しい道」で、それは「訓練と自制」「想像力と現実把握を必要とする」と簡潔に述べている。<sup>6</sup> Eliot が Thomas Hobbes を批判し、<sup>7</sup> また Niccolo Machiavelli を ‘a doctor of the mean’<sup>8</sup> と言ったのは、このような Eliot の *via media* に対する考え方からなされたものである。Eliot にとって「中道」とは、対立の中でしか成立しない「正統主義の道に見出されるべきもの」<sup>9</sup> なのである。

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *After Strange Gods* (London: Faber and Faber, Ltd., 1934), p. 38.

<sup>2</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 488.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, “A Commentary,” *The Criterion*, XIII (October, 1933), p. 118.

<sup>4</sup> T. S. Eliot, *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (London: Faber and Faber, Ltd., 1968), p. 137.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 144.

<sup>6</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 359.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 359.

<sup>8</sup> T. S. Eliot, *For Lancelot Andrewes* (London: Faber and Faber, Ltd., 1970), p. 50.

<sup>9</sup> “There must always be a middle way, though sometimes a devious way when natural obstacles have to be circumvented; and this middle way will, I think, be found to be the way of orthodoxy; a way of mediation, but never, in those matters which permanently matter, a way of compromise.” (T. S. Eliot, “Catholicism and International Order,” *Essays Ancient and Modern* [London, Faber and Faber, Ltd., 1949], pp. 134-5)

ところで、今まであげた Eliot の批評論の年代を注意してみると、Eliot の *via media* の考えが表われている批評論は、Eliot の改宗の年である 1927 年以降に多く目につくが、Eliot は、このような *via media* の考えを既に、1923 年の 'The Function of Criticism' の中で、批評の「共同の活動 (co-operative activity) の可能性」に触れ、これを「我々の外側にある何物か」で「仮に真実と呼んでもよい」と言っている<sup>1</sup>頃から念頭に置いていたようである。つまり、Eliot の批評論に見られる歴史的批評と非歴史的批評、詩と信念、ヒューマニズムと宗教、更には思考と感情等の間に、Eliot は、「我々の外側にある何物か」で「仮に真実と呼んでもよい」ようなものが見出されるということを暗示していると考えられないだろうか。

以下の章では、両極端の間にある「我々の外側にある何物か」で「仮に真実と呼んでもよいもの」を追い求める Eliot の精神的遍歴が、Eliot が改宗する以前に書いた *The Hollow Men* 第 5 節で「観念」と「実在」、「運動」と「行為」等の間に「影」(shadow) が落ちると歌った頃から、改宗後の *Ash-Wednesday*, *Four Quartets* までの作品の中で如何なる軌跡をたどっているかを考察して行きたい。

## II

前章に於ては、Eliot の *via media* の考えを彼の批評論集の中で、垣間見てきたが、このような *via media* に一脈通じる Eliot の態度は、*The Hollow Men* 第 5 節の中で次のように歌われている。

Between the idea  
And the reality  
Between the motion  
And the act  
Falls the Shadow

*For Thine is the Kingdom*

Between the conception  
And the creation  
Between the emotion  
And the response  
Falls the Shadow

*Life is very long*

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 34.

Between the desire  
 And the spasm  
 Between the potency  
 And the existence  
 Between the essence  
 And the descent  
 Falls the Shadow

*For Thine is the Kingdom*<sup>1</sup>

この一節に見られる「観念」(idea)と「実在」(reality)、また「運動」(motion)と「行為」(act)等の相反する両極端の間 (between) に落ちる ‘Shadow’ は一体何を意味するのだろうか。この ‘Shadow’ のイメージの意味を考察するに先立って、*The Hollow Men* なる詩の成り立ちを考えてみる必要がある。

この詩は、もともと Eliot の *The Waste Land* の草稿に見られる ‘Song’ を核として、いろいろな変遷を経て、1925年現在のものになった。<sup>2</sup> この詩の核である ‘Song’ の書き出しは次のようである。

The golden foot I may not kiss or clutch  
 Glowed in the shadow of the bed<sup>3</sup>

ここに見られる ‘shadow’ のイメージは、Eliot が、初期の詩、例えば ‘Sweeney Erect’ の中で、救いようもない人間の絶望を歌った次の一節の ‘shadow’ のイメージとは全く趣きを異にしている。

The lengthened shadow of a man  
 Is history, said Emerson  
 Who had not seen the silhouette  
 Of Sweeney straddled in the sun.<sup>4</sup>

Eliot の初期の詩に見られる ‘shadow’ もしくはこれに類するイメージは、‘Prelude’ の中の ‘dingy shades’, ‘a blackened street’ などから窺うことが出来るように、<sup>5</sup> くすんだ灰色の風景描写の中に見られる単調な無気力な人生の気分を醸し出しているものである。しかし、‘Song’ に見られる ‘shadow’

<sup>1</sup> *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* (London: Faber and Faber, Ltd., 1969), p. 85.

<sup>2</sup> A. D. Moody, *Thomas Stearns Eliot Poet* (London, New York, Melbourne, Cambridge, Cambridge University Press, 1979), pp. 118-121.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, *The Waste Land, A Facsimile and Transcript of the Original Drafts*, edited by Valerie Eliot (London: Faber and Faber, Ltd., 1971), p. 99.

<sup>4</sup> *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*, p. 43.

<sup>5</sup> *Ibid.*, pp. 22-3.

のイメージは、書き出しの ‘The golden foot’ から窺うことが出来るように、きわめて宗教的な色彩を帯びている。実際、Eliot は、*The Waste Land* の中で、この ‘shadow’ を次のように歌っている。

There is shadow under this red rock  
 (Come in under the shadow of this red rock),  
 And I will show you something different from either  
 Your shadow at morning striding behind you  
 Or your shadow at evening rising to meet you;  
 I will show you fear in a handful of dust.<sup>1</sup>

ここに見られる ‘shadow’ のイメージは単なる地面に映る影とは違った何物か、つまり「一握りの塵の中の恐怖」である。*The Hollow Men* の一部が既に *The Waste Land* の草稿に見られ、そして、*The Waste Land* の ‘shadow’ のイメージが、今見たように、Eliot の初期に見られる ‘shadow’ とは違った質のものであるということを考えるならば、この *The Hollow Men* に見られる ‘Shadow’ のイメージが Eliot の精神的遍歴に於て、大きな意味を持っていることは明らかである。実際、この *The Hollow Men* の第5節が、Eliot が改宗する前の1925年に、それまでのこの詩に付け加えられたということ、また、このコンテクストに見られる祈禱書の『主の祈り』‘*For Thine is the kingdom*’等を考え合わせると、この ‘shadow’ のイメージは Eliot の宗教的発展の一つの橋渡しともなるべきもので、言うなれば ‘twilight Kingdom’<sup>2</sup> であり、取りもなおさず英国国教会への改宗の兆と考えられたいだろうか。

ところで、‘shadow’ のイメージがこのように Eliot の改宗の兆と考えられることと、この ‘shadow’ が「観念」と「実在」、「運動」と「行為」等の相反する二つの対極の間 (between) に落ちなければならないということが如何に関係するのだろうか。この辺の事情を解明しようとするなら、二元論 (dualism) に対する疑惑から生み出された F. H. Bradley の懐疑的精神の感化を受けた Eliot の精神的遍歴を見なければならないだろう。

Eliot は、懐疑的精神を「証拠を吟味する習性と一気に事を決定しない能力」であると述べているが、<sup>3</sup> これはまさに前章で述べた *via media* の精神、つまり、一方の極端に走らないで、それぞれの極を吟味し、一気に事を決定しない

<sup>1</sup> *Ibid.*, p. 61.

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 84.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, *Notes towards the Definition of Culture* (London: Faber and Faber, Ltd., 1967), p. 29.

で、両極端の間を行く態度の根底を支えているものではなからうか。Eliot は、‘A Sceptical Patrician’の中で、この懐疑的精神を「ボストン生まれでない人々に説明することが難しく」「ユニテリアン主義の産物で、それに付随して生ずるものである」と言いながらも、<sup>1</sup> ‘Francis Herbert Bradley’の中で、その精神を「宗教的理解の為には有用な素養」<sup>2</sup> であると言って Bradley の中に見て取っている。

Bradley 哲学は究極的には一元論 (monism) であるが、これは Bradley の懐疑的精神によって推し進められたものである。つまり、Bradley 哲学に見られる懐疑的精神は主観、客観の二元論から生み出されたもので、Bradley はこのことについて「このような前提からは全くの懐疑的精神 (scepticism) 以外の道しか残されていない」<sup>3</sup> と言っている。このような立場から Bradley は *Appearance and Reality* の序文で、イギリス哲学に最も必要とされるのは「第一原理についての懐疑的研究」であるといい、その懐疑的精神を「ただ単にある主義、あるいはいくつかの主義を疑ったり、それらに疑惑を抱いたりすることではなく、全ての偏見に気付き、疑おうとする一つの企て」であると定義している。<sup>4</sup> 実際、*Appearance and Reality* は、实在 (reality) を、知解出来る言葉で、知ることは不可能であるということを証明しようと試みたものである。Eliot が、1924年の *Vanity Fair* の中で、Bradley の判断の理論を受け入れるなら「諦観」(resignation) あるいは「絶望」(despair) に導かれてしまうであろうと述べ、Bradley の感受性は限りなく幻滅を感じさせる何物かであり、苦悩のおのきで鼓動するものであると言っている<sup>5</sup>が、このような Eliot の Bradley

<sup>1</sup> “[A] scepticism which is difficult to explain to those who are not born to [Boston]. This scepticism is a product, or a cause, or a concomitant, of Unitarianism; it is not destructive, but it is dissolvent.” (T. S. Eliot, “A Sceptical Patrician,” *The Athenaeum* [May 23, 1919], p. 361) Cf. Robert Sencourt, *T. S. Eliot A Memoir* (London: Garnstone Press, 1971), p. 110: “from Unitarianism [Eliot] lapsed into agnosticism, and out of agnosticism found his way (after inclining towards Buddhism around 1922) to the Catholic idea which he preferred in its Anglican form. He said at another time that he was driven to belief by seeing agnosticism pushed to its limits by Bertrand Russell.”

<sup>2</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, pp. 449-50.

<sup>3</sup> F. H. Bradley, *Essays on Truth and Reality* (Oxford: at the Clarendon Press, 1968), p. 199.

<sup>4</sup> F. H. Bradley, *Appearance and Reality* (Oxford: at the Clarendon Press, 1966), p. viii.

<sup>5</sup> “Once you accept [Bradley’s] theory of the nature of the judgement, and it is as plausible a theory as any, you are led by his arid and highly sensitive eloquence (no English philosopher has ever written finer English) to something which, according to your temperament, will be resignation or despair— . . . It is not the sensibility of Bernard Shaw, or of Anatole France, or of Thomas Hardy: it is something infinitely more disillusioned than any of these who are chosen because they have so little in common with each other; it may be harder and more orderly; but throbbing at a higher rate of vibration with the agony of spiritual life.” (T. S. Eliot, “A Prediction in Regard to Three English Authors,” *Vanity Fair*. XXI 6 [Feb. 1924], pp. 29, 98.)

観は、Bradley 哲学の中に見た懐疑的精神を踏まえた上での見解ではなからうか。実際、このような懐疑的精神を基盤とする絶望は、Eliot の ‘Gerontion’, ‘Whisper of Immortality’, *The Hollow Men* 等に表現されていると思う。従って、Eliot が Bradley に惹かれたのは、Bradley の「文体」だけにあるのではなく、<sup>1</sup> この絶望を生み出す懐疑的精神そのものにあつたように思われる。そして、この Bradley の懐疑的精神が、先程、触れたように、主観、客観の二元論にあるということを想起すなら、Bradley が *Ethical Studies* の結論で、「一方の偏った考えが明晰と一貫性を求めて走り、自分の都合のよい、いずれかを当て嵌めることくらい容易なことではない」<sup>2</sup> と言っていることも理解されることと思う。Eliot 自身も、このような Bradley の態度を見抜いて、Bradley 論の中で、*Ethical Studies* の一節を引用しながら「人間の『単なる意志』と『聖なる神の意志』との間に明瞭な一線を引くことは出来るが、Bradley は、この手続きを示す時、意志、あるいは知性のいずれかを、他を犠牲にして誇張することがないように注意している」<sup>3</sup> と言い、このような手続きは Arnold も Babbitt 教授も受け入れることが出来ない手続きであるとも付け加えている。

このように、Bradley の懐疑的精神が二元論にあり、これが Eliot の *via media* の根底を支えていると考えるならば、Eliot が神と人間との二つの極の間にある宗教を問題にする時、懐疑的精神を「宗教的理解の為には有用な素養」であると言ったり、Pascal を「知的な信仰者」(intelligent believer)<sup>4</sup> と呼んだことも頷かれることと思う。Eliot が Pascal の中に見たのは「信仰の精神 (the spirit of belief) と切り離すことの出来ぬ懐疑のデーモンに敢然と立ち向う」<sup>5</sup> 態度であつた。しかし、Eliot は、この Bradley 哲学に見られる懐疑的精神を超克することによって、英国国教会へ改宗していったのである。Eliot にとって懐疑的精神は ‘Christian and Communism’ で言っているよ

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley* (London: Faber and Faber, Ltd., 1964), pp. 10-11: “how closely my own prose style was formed on that of Bradley and how little it has changed in all these years.” Cf. T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 445.

<sup>2</sup> F. H. Bradley, *Ethical Studies* (Oxford: at the Clarendon Press, 1962), p. 322.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 453.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 408.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 411.



うに、改宗の「序」(preface)<sup>1</sup> にすぎなかった。

### III

従って、*The Hollow Men* の「観念」と「実在」、「運動」と「行為」等の間に落ちる‘Shadow’のイメージは、上述のような二元論に対する疑惑から生み出された懐疑的精神と信仰の兆とが表裏一体となっていることを表わすものと考えられる。つまり、この‘shadow’のイメージは相反する二つの対極の間に落ちて——その意味で懐疑的精神と信仰の両極端を合わせ持っている——、Eliot の *The Waste Land* と *Asb-Wednesday* のかけ橋と考えられないだろうか。<sup>2</sup> このように、この‘Shadow’のイメージは Eliot の精神的遍歴に於いて、信仰の兆と懐疑的精神の二つを合わせ持ったものと考えられるが、Eliot はこの二つのうち懐疑的精神の部分を超克することによって、英国国教会へ改宗していったのである。Eliot の *A Sermon* に見られる逆説的な言い方を用いるならば、<sup>3</sup> Eliot の改宗は、悲観主義、絶望へと導いた懐疑的精神を更に押し進めることによってなされたものであると言ってもいいであろう。

この辺の事情は、Eliot の改宗後に書かれた *Asb-Wednesday* を吟味することによって明らかにすることが出来ると思う。現在の *Asb-Wednesday* では第 III 章になっているが——この作品の成立から見ると、この第 III 章は、1930年

<sup>1</sup> “Towards any profound conviction one is borne gradually, perhaps insensibly over a long period of time, by what Newman called ‘powerful and concurrent reason’ . . . At some moment or other, a kind of crystallisation occurs, in which appears an element of *faith* . . . In my own case, I believe that one of the reasons was that the Christian scheme seemed to me the only one which would work . . . That was simply the removal of any reason for believing in anything else, the erasure of a prejudice, the arrival at the scepticism which is the preface to conversion.” (T. S. Eliot, “Christianity and Communism,” *The Listener* [March 16, 1932], p. 383)

<sup>2</sup> Helen Gardner は *The Art of T. S. Eliot* (London: The Cresset Press, 1961) の中で、この‘shadow’のイメージは Joseph Conrad の *Heart of Darkness* の主人公 Marlow が Krutz の死に際して感じた懐疑的精神(scepticism)と質を同じにするものである(pp. 109-113)と言っているが Bradley 哲学に見られる二元論から生み出される懐疑的精神を無視しては、この第 5 節の‘shadow’のイメージを正確に理解することは出来ないであろう。

<sup>3</sup> “One may become a Christian partly by pursuing scepticism to the utmost limit. I owe much, in this way, to Montaigne; something, in this way, to Bertrand Russell’s essay, *A Free Man’s Worship*: the effect this essay had upon me was certainly the reverse of anything the author intended.” (T. S. Eliot, *A Sermon*, preached in Magdalene College Chapel, 7 March 1948, Cambridge, p. 5)

*Asb-Wednesday* という作品の形を取る前の 1929 年に ‘Al som de l’escalina’ として既に発表されている<sup>1</sup>——この書き出しは次のようになっている。

At the first turning of the second stair  
I turned and saw below  
The same shape twisted on the banister  
Under the vapour in the fetid air  
Struggling with the devil of the stairs who wears  
The deceitful face of hope and of despair.<sup>2</sup>

ここに見られる苦闘は、そのまま Eliot のそれまでの精神的苦悩を反映しているように見える。そして、Eliot は、第二の段階の第二の曲り角で「彼らの縄れ合いをそのままにして、下を振り返りながら立ち去った」と歌い、第三段階の第一の曲り角では次のように歌っている。

Distraction, music of the flute, stops and steps of the mind over  
the third stair,  
Fading, fading; strength beyond hope and despair  
Climbing the third stair.<sup>3</sup>

この一節は、Dante の Arnaut の挿話を踏まえたドラマチックな場面<sup>4</sup>で、「段階の悪魔」(the devil of the stair) が牧羊神 (Pan) の姿となって、楽の音で主人公を誘惑するが、なんとか切り抜けていくところである。ここに於て、相反する二つの極にある ‘hope’ と ‘despair’ が第三の段階を昇り行くということ、*The Hollow Men* に見られる ‘between’ つまり、二元論を基盤とする両極端に介在する懐疑的精神を克服して行く姿だと考えられないだろうか。

このような姿は、1930年に *Asb-Wednesday* としてまとまった一連の詩を作る目的で新たに書き加えられた第 IV 章の中で頻繁に使われる ‘between’ という語からも窺われる。

Who walked between the violet and the violet  
Who walked between  
The various ranks of varied green  
Going in white and blue, in Mary’s colour,

<sup>1</sup> Grover Smith, *T. S. Eliot’s Poetry and Plays* (Chicago: The University of Chicago press, 1965), p. 135.

<sup>2</sup> *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*, p. 93.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 93.

<sup>4</sup> Grover Smith, *T. S. Eliot’s Poetry and Plays*, pp. 148-9.

Talking of trivial things  
 In ignorance and in knowledge of eternal dolour  
 .....  
 Here are the years that walk between, bearing  
 Away the fiddles and the flutes, restoring  
 One who moves in the time between sleep and walking,  
 .....  
 The silent sister veiled in white and blue  
 Between the yews, behind the garden god, . . .<sup>1</sup>

ここに見られる「白と青のヴェールをつけた沈黙の尼僧」は、記憶されている現実と想像的な幻想、また庭の花々と教会の礼拝の色との間を歩いている。実際、彼女は不完全な人間の日々の間を、つまらないことを話しながら歩いているが、何かしら、永遠の嘆きを超越した洞察を分ち持っている。つまり彼女は神の言葉に全く盲目的な‘sleep’と信仰の生活に入った‘waking’との間を歩いている人を取り戻そうとしている。このように、この一節に見られる‘between’は、この世的なもの自然界を超えた神聖なものとの間には測り知れない不可解な関係を示している。従って、この *Asb-Wednesday* に見られる‘between’は「現実」と「観念」、「運動」と「行為」等の間に‘Shadow’が落ちると歌った *The Hollow Men* の‘between’とは全く質を異にしている。

このように、Eliot を悲観主義、絶望へと導いた懐疑的精神は *The Hollow Men* から *Asb-Wednesday* に見られる‘between’の質的变化と相俟って、信仰の段階まで達せられているが、この質的变化は *The Hollow Men* の‘Shadow’のイメージが *Four Quartets* に到って宗教的な黙想の域まで高められていったのと全く同じである。<sup>2</sup> しかし、この‘between’の質的变化の背景には、懐疑的精神の基盤となっている二元論を何とか克服しようとする Eliot の精神的遍歴が見られる。Eliot が若い頃、Bradley の一元論に興味を持ち、“Leibniz’ Monads and Bradley’s Finite Centres”なる論文を書いたということはこの辺の事情を裏づけるものなのである。そして、この一元論的な考え方は、Eliot の‘Tradition and the Individual Talent’に見られる歴史観、‘The Metaphysical Poets’で取り扱われている感受性の問題等に反映されているし、また彼の

<sup>1</sup> *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*, p. 94.

<sup>2</sup> “I said to my soul, be still, and let the dark come upon you  
 Which shall be the darkness of God.  
 .....

So the darkness shall be the light, and the stillness the dancing.” (*Ibid.*, p. 180)

詩を吟味するなら ‘Rhapsody on a Windy Night’ の ‘a lunar synthesis’<sup>1</sup>, *Four Quartets* に見られる神秘的要素<sup>2</sup> ‘still point’ 等からも推し測ることが出来る。Eliot が英国国教会の中でも高教会 (High Church) に属しているということは、受肉 (incarnation) の教理等と相俟って、このような一元論的な考えがあったことによるものと思われる。

しかし、英国国教会の精神である *via media* は Paul Elmer More によると、「中道」、「中間」のものであり、決して両極端を ‘compromise’ するものではない。つまり、*via media* は一つの ‘direction’ なのである。<sup>3</sup> More が Eliot との手紙の遣り取りの中で、Eliot の神性を「アリストテレスの絶対者とフェニキアのモロク (Moloch) の不浄な結婚から流産したものであり…その源泉は一元論と呼ばれる理性の呪うべき罪の形態である」<sup>4</sup> と言って攻撃しているが、二元論の立場に立つ More からすれば当然のことのようである。しかし、Eliot は、More が批判するほど一元論的な立場に固執してはいない。それは、彼が “Leibniz’ Monads and Bradley’s Finite Centres” の中で究極的に Bradley の一元論に満足することが出来なかったと述べていることにも窺われるが、<sup>5</sup> それ以上に、一元論か二元論かという両極端に走ることを嫌う *via media* を尊ぶ Eliot の考え方そのものにあつたように思う。実際、Eliot の詩を吟味するなら、先ほど見た一元論的な考えのみならず、‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’ に見られる ‘you and I’、そして *Four Quartets* の ‘So I assumed a double part’ 等に二元論的な考え方が表わされている。

このように考えると、前に触れた Dante 論の註で「矛盾対立するものの結合は全て、真理を作り上げるとは限らない」と言ったり、‘Catholicism and International Order’ で、中道は「決して…妥協 (compromise) の道ではない」と言った意味が理解されることと思う。Eliot にとって、両極端の中間

<sup>1</sup> *Ibid.*, p. 24.

<sup>2</sup> 拙論「T. S. Eliot における神秘主義的要素の意味——知性とのかわりにおいて」『試論』15集(東北大学文学部英文学研究室、1975年6月)、pp. 54-70.

<sup>3</sup> *Anglicanism*, p. xxxvii.

<sup>4</sup> A. H. Dakin, *Paul Elmer More* (Princeton, 1960), p. 290.

<sup>5</sup> “[W]hat we do know is that we are able to pass from one point of view to another, that we are compelled to do so, and that the different aspects more or less hang together.” (T. S. Eliot, “Leibniz’ Monads and Bradley’s Finite Centres,” *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley*, p. 207) Cf. “The Absolute responds only to an imaginary demand of thought, and satisfies only an imaginary demand of feeling. Pretending to be something which makes finite centres cohere, it turns out to be merely the assertion that they do.” (*Ibid.*, p. 202)

にあるものは、「我々の外側にある何物か」で「仮に真実と呼んでもよい」ものである。

以上のように *The Hollow Men* の ‘between’ に介在する懐疑的精神と信仰の兆を合わせ持っている ‘Shadow’ のイメージの立場から Eliot の精神的遍歴を考えるならば、それはまさに Eliot が *Murder in the Cathedral* の Thomas に

the substance of our first act  
Will be shadows, and the strife with shadows.<sup>1</sup>

と言わせたように、‘shadow’ との戦いであったと言うことは出来ないだろうか。

#### IV

以上のように考えると、*via media* という語が《序》で触れたように、たとえ J. H. Newman によって作り広められたものであったとしても、Eliot の *via media* は、Bradley 哲学に見られる懐疑的精神を基盤にしたものであるという立場から考えた場合、J. H. Newman が *Apologia pro Vita Sua* の中で、*via media* を「両極端から退くことにすぎず」とし、これに基づく宗教は、‘a paper religion’ であるといった場合の *via media* とは全く違っている<sup>2</sup>。本稿の目的は Eliot と Newman との違いについて述べるものではないが、Eliot の *via media* についての考えをより明確にするために Newman を引き合いに出して論を進めるなら、Eliot が英国国教会に改宗したのは、今まで見て来たところからも分かるように、直接宗教的なものからというよりは、懐疑的精神を基盤とする字義通りの *via media*、つまり、中道を尊ぶ Eliot の精神そのものによるものであるのに対し、Newman が英国国教会を棄てて、ローマ・カトリックに改宗したのは、キリスト単性論を究明することによって、英国国教会に疑念を持つようになったからである<sup>3</sup>。ここで注意しなければならないことは、Newman のこのような英国国教会の教義自体に向けられた懐疑的精神は、Eliot が「証拠を吟味する習性と、一気に事を決定しない能力」であると言っ

<sup>1</sup> *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*, p. 246.

<sup>2</sup> “A *Via Media* was but a receding from extremes—therefore it needed to be drawn out into a definite shape and character: . . . It was at present a paper religion . . . I say, ‘. . . the *Via Media*, viewed as integral system, has scarcely had existence except on paper.’” (*Apologia pro Vita Sua*, p. 70)

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 108.

たのとは違って、「批評からはじめる代り、摂理によって我々の前に置かれた宗教に寛容な心で自分自身を投げ込んだ」<sup>1</sup>後、矛盾誤謬を発見するというものである。Newman のこのようなあくまで信仰の立場に立つ態度は、当時の自由主義(liberalism)<sup>2</sup>に対する反論から生まれてくるものであろうが、ここでは、ただ Newman の *via media* への批判は、Eliot の言う懐疑的精神からなされたものではなく、英国国教会へ「自分自身を投げ込んだ」後、その教義を究明することによってなされたものであるということだけを指摘するに留めたい。

一方、Eliot が、*via media* に基づく英国国教会の教義に対してどのような考えを持っていたかどうかはよくわからないが、アングリカニズムの弱点に気付いていないわけではなかった。Lancelot Andrewes 論の中で Eliot は次のように言っている。

[W]e must not confound the history of a Church with its spiritual meaning . . . [A] Church is to be judged by its intellectual fruits, by its influence on the sensibility of the most sensitive and on the intellect of the most intelligent, and it must be made real to the eye by monuments of artistic merit. The English Church has no literary monument equal to that of Dante, no intellectual monument equal to that of St. Thomas, no devotional monument equal to that of St. John of the Cross, no building so beautiful as the Cathedral of Modena or the basilica of St. Zeno in Verona. But there are those for whom the City churches are as precious as any of the four hundred odd churches in Rome . . . [T]he achievement of Hooker and Andrewes was to make the English Church more worthy of intellectual assent. No religion can survive the judgment of history unless the best minds of its time have collaborated in its construction.<sup>3</sup>

この一節に見られるように「英国国教会には Dante にならぶ文学碑もなく、St. Thomas にならぶ信仰の碑も . . . ない。」しかし、Eliot は、「教会の歴史と、その精神的な意味を混同してはならない」と言っていて、英国国教会の精神を、‘the City churches’ の中に見出している。つまり、Eliot は、英国国教会の意味を「当時の最も秀れた精神を表わす」文化的偉業の中に見て取っている。それ故、Eliot にとって、英国国教会は Newman の言う ‘a paper religion’ ではなくて、「その時代の最も秀れた精神がその建設に於て、協力しな

<sup>1</sup> *Ibid.*, p. 186.

<sup>2</sup> *Ibid.*, pp. 254-62.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, pp. 342-3.

ければどのような宗教も歴史の判断を免れて生き延びることが出来ない」種類に属するものなのである。ここで言う「精神」とは「最も感受性の豊かな人々の感性や、最も知的な人々の知性に及ぼす影響によって支えられる‘intellectual fruits’」であり、この「知性」の持ち主である‘civilized men’は、Eliotによれば「深遠な懐疑的精神と最も深い信仰を結びつける」<sup>1</sup> 人間なのである。

このように、Eliot は英国国教会の弱さに気付きながらも、その力強い「精神」を見抜いている。Eliot のこのような英国国教会に対する考え方は、その精神である *via media* を「訓練と自制」、「想像力と現実把握を必要とするもの」と見、その根底に「証拠を吟味する習性と、一気に事を決定しない能力」である懐疑的精神を置いていることによるものと思う。この背景には、今まで考察したように、Bradley 哲学が見られるが、Eliot は、この *via media* の目指すところを単なる Bradley に見られる一元論とか二元論と言った議論を超えて、「我々の外側にある何物か」で「仮に真実と呼んでもよい」ものと見た。Eliot が英国国教会に改宗したのは、以上のような Eliot 独自の *via media* についての考えがあったからではなかろうか。

1979. 9. 1 受理

---

<sup>1</sup> “There is only one higher stage possible for civilised men: that is to unite the profoundest scepticism with the deepest faith.” (T. S. Eliot, “Leçon de Valéry,” *The Listener* [9 January 1947], p. 72) Cf. “Scepticism is highly civilised trait” (T. S. Eliot, *Notes towards the Definition of Culture*, p. 29).